



校友会誌編集委員（大正13年卒業アルバムより）

# 高商

倉田 稔（本学教授）



乗富 道夫  
（大正13年卒業）



福田 勇一郎  
（大正13年卒業）



寺田 行雄  
（大正15年卒業）

いる。教師の中では大熊信行と親しかった。高商には外国人教師が多かった。作家では志賀直哉に傾倒した。そして多くの小説を全国的雑誌に投稿している。多喜二は、高商図書館の雑誌『改造』『中央公論』などに載った文学作品に、いくつか書きこみをしている。その調査報告書は本学図書館にある。また、大杉栄の本の中の、クロボトキン作品の削除部分を訳して書き込んでいる（本学図書館所蔵）。

多喜二の卒業論文は、アルフレッド・ストロクの劇とクロボトキンの翻訳であった。この実物が現在商大にないのがミステリーとなっている。コピーしかないのである。また乗富道夫の卒業論文も実物がなく、それはマルクス『共産党宣言』の英語版の翻訳であった。それが教授会で大問題になったそうだ。これを出して乗富は卒業したことになるのだが。

多喜二は卒業して北海道拓殖銀行に勤める。その卒業直後、有名な小樽高商軍事教練事件が起きるのであった。

（注）小樽高商軍事教練事件

小樽高商の軍事教練の教官（軍人）が、教練用に不適当な想定文を書いたので、一部学生がヒューマンイズムの立場から反対し、全国的に有名になった。

## 多喜二の業績（作品）一覧

小林多喜二の作品は、『小林多喜二全集』全7巻（新日本出版社、1980～83年）にほとんど収められている。それを見ていただきたい。（1）として、彼のいくつかの主要作品を抜き出しておく。

しかし、『全集』の中には収録されなかったものもあるので、それらを（2）として加えておく。

### （1）小林多喜二主要作品一覧

「作品テ・マ」完成時期、西暦年・月、（『発表誌』年・月）で、早い順で示す。

\*印は、全集に入っていないもの、未印刷つまり未発見である。

{ }は説明。

- 「今は昔」（『尊商』1917・12）
- 「祖母の遺言」（『小説倶楽部』1921・8）\*
- 「ある嫉妬」（『小説倶楽部』1921・12）\*
- 「龍介と乞食」（『小説倶楽部』1922・3）
- 「健」（『新興文学』1922・1）
- 「防雪林」1928・4（『社会評論』1947・11～12）
- 「一九二八年三月一五日」1928・8（『戦旗』1928・11～12）
- 「東俱知安行」1928・9（『改造』1930・12）
- 「蟹工船」1929・3（『戦旗』1929・5～6）
- 「不在地主」1929・9（『中央公論』1929・12）
- 「工場細胞」1930・2（『改造』1930・4～6）
- 「オルグ」1931・4（『改造』1931・5）
- 「安子」{初めは、「新女性気質」という題だった}1931・10（『都新聞』1931・8～10）
- 「沼尻村」1932・3（『改造』1931・4～5）
- 「救援ニュース NO. 18. 付録」1929・12（『戦旗』1930・2）
- 「転形期の人々」1932・8（『ナツプ』1931・10～11）
- 「党生活者」1932・8（『中央公論』1933・3～4）
- 「地区の人々」1933・1（『改造』1933・3）
- 「右翼的偏向の諸問題」1933・2（『プロレタリア文学』1932・2～3）

### （2）『小林多喜二全集』に収録されていない作品

- ・西丘はくあ宛て葉書 倉田稔編『小林多喜二短編小説集 蟹工船まで』論創社出版予定
- ・[清水賢一郎（多喜二のペンネーム）]「戦争から帰ってきた職工...八・一（反戦）デー近づく」『赤旗』1932年6月25日第80号と7月1日第81号に連載
- ・大熊信行宛て手紙2つ。 推定大正15年3月および昭和2年2月6日。『小林多喜二生誕100年没後70周年記念シンポジウム記録集』東銀座出版社2004年および『国文学』48の14
- ・震災時の葉書 大崎哲人「小林多喜二が小牧近江に当てた葉書」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 平成17年2月号・論評 倉田稔書『小林多喜二伝』648ページ



## 「小林多喜二伝」

A5版・913ページ  
発行所／論創社  
著者／倉田 稔